

「重複表現」

「馬から落馬」「一番最初」のように、同じ意味を重ねてしまうものを重複表現(重言)といい、避けたい表現の一つです。

「落馬」には馬という言葉が入り、「一番最初」も「最」自体に一番の意味があるので、「一番」と「最」が重複しています。「先ず最初」も同じです。

その他、使いがちな重複表現を挙げてみましょう。「その本は年内中に発売開始です」「年内」とは「今年のうち」ですから、「年内中」は今年の中のうち、「発売」とは売り始めることなので、「発売開始」は売り始めることを始める、となってしまう。「いい知らせを期待して待つ」「期待」という言葉

の中に、「すでに」「待つ」という言葉が入っています。

「炎天下のもとと熱戦を繰り広げていました」「炎天下」とは「炎天のもと」ですから、炎天のもとのもと、になってしまう。

「いやあ、ひどい被害をこうむってね。」「こうむる」を漢字で書くと「被る」です。「被る害」が被害ですから、意味が重なっています。

「ハンゲル文字」。「ハン」が大きい・正しい、「ゲル」が文字という意味です。したがって、単にハンゲルというのが正解です。

「軽く会釈」。広辞苑では「会釈」を「軽く首を垂れて「礼すること」と説明しており、「会釈」だけで十分です。「製造メーカー」も「メーカー」で十分です。

準備は事前に行うものですから、「前もって準備する」はおかしい。まだありますよ。「余分な贅肉」「雪辱を晴らす」「断トツの一位」「過半数を超える」「思いがけないハプニング」など、「まだまだ未解決」な誤りがたくさんありますよ。

O W L I N F O R M A T I O N

松浦武四郎の碑文を語るトークイベント

北海道の名付け親、松浦武四郎の碑に刻まれたアイヌ民族を語る。
4月22日(土) 14:00~15:30
紀伊國屋書店札幌本店 1Fインナーガーデン
(札幌市中央区北5条西5丁目7 sapporo55ビル)
入場無料

北海道150年事業でキーパーソンとして名をあげられた北方探検家、松浦武四郎。1869年8月15日に太政官布告によって蝦夷地は「北海道」となりましたが、その原案となった「北加伊道」を政府に提案したのがこの人物でした。

6度にわたり蝦夷地(北海道)を調査し、詳細な記録を残した武四郎の道程を追うように建てられた碑を求め、北海道各地やサハリンを訪ね歩いて、碑や碑文全文を記録した『新版 武四郎碑に刻まれたアイヌ民族 民族の復権をめざして』が今年1月に刊行されました。書籍の発売を記念して、著者の杉山四郎さんによるトークイベントを行います。

道なき道を通る探査行で、土地に通じるアイヌの人々の協力で支えられ、彼らと寝食をともにして交流を深めた武四郎。その碑群から見えてくる、アイヌ民族の姿を語ります。お問い合わせは中西出版まで。



中西出版刊、B6判251頁
定価:本体1,200円+税

70~80年代、旭川での熱い舞台の記憶を札幌でも

旭川・劇団『河』と『河原館』の20年
7月1日(土)~6日(木) 10:00~19:00(最終日は18:00まで)
紀伊國屋書店札幌本店 2Fギャラリースペース
※トークショーは1日14:00~15:00 1Fインナーガーデン
(札幌市中央区北5条西5丁目7 sapporo55ビル)
入場無料

「あうるの杜」でもご紹介した旭川の劇団「河」。その軌跡を辿った『“あの日たち”へ』の刊行を契機に、旭川文学資料館で昨年12月から今年1月にかけて行われた企画展を、札幌でも開催します。会場では各公演の舞台写真やポスター台本など、当時の貴重な資料を展示。初日には著者の那須さんなどによるトークショーも企画しており、1970~80年代に強烈な存在感で観客を魅了し、当時の在京演劇人にも注目された劇団の足跡を振り返ります。

旗揚げ以来、リアリズム劇中心だった「河」は、70年代になるとアンクラ・小劇場演劇の高まりを受け、唐十郎らの作品を次々と上演。76年には在京劇団の事情で上演不能となった清水邦夫の戯曲を、作者の演出で初演しました。北海道演劇の一時代を伝える、演劇ファン必見の展示です。お問い合わせは中西出版まで。



劇団「河」の拠点「河原館」(1979年)

北海道で進化した板金建築の現在

現代板金建築
北海道鋼機デザインアワード記念誌編集委員会・編著
定価:本体2,000円+税

世界有数の積雪寒冷地である北海道で独自の発展を遂げた建築板金技術。板金を中心に鉄を使用した建築作品を対象として設立された「北海道鋼機デザインアワード」が、創立5年の成果を総括した記念誌を発行しました。受賞作品に設計者の解説をつけた実例集をはじめ、北海道の建築板金技術史や展開の可能性を語る対話を収録。過去と現在を記録し、未来を探ることでその魅力と可能性を提起しています。



北海道鋼機デザインアワード
記念誌編集委員会
(発売元:鹿島出版会)
B5判、95頁
2017年2月刊行

毎日更新“漢方型メディア”の集大成

札幌人図鑑
福津京子・著
定価:本体1,389円+税

2012年5月の配信開始以来、札幌在住の魅力的な人物のインタビューを毎日更新してきた動画サイト“札幌人図鑑”。1000回を迎えた2015年3月までの分から、70人のお話が本になりました。パーソナリティの福津さんが一人で出演者探しから取材・撮影、掲載までを行ってきたこの図鑑。すぐそばにいる“普通の人”が語るライフストーリーはドラマチックで、取材を続けてきた福津さん自身の軌跡のようでもあります。



北海道新聞社
四六判、232頁
2017年3月刊行

樺太の歴史を後世に伝える一冊

樺太四〇年の歴史
四〇万人の故郷
原暉之、天野尚樹・編著
定価:本体1,852円+税

北海道の北に位置するサハリン(樺太)島の北緯50度以南は、1905年から40年間日本領となり、終戦時には38万人強が暮らしていました。戦後72年が経ち出身者や関係者が減少する今、気鋭の樺太史研究者たちが、最新の成果を踏まえて最初の樺太通史を執筆。樺太の記憶を次世代に伝承するべく、漁業や林業、炭鉱などの産業の様子、人々がどのように暮らし、終戦時に何があったかを丁寧にまとめました。



全国樺太連盟
四六判、363頁
2017年4月刊行



2016年の出版市場動向が発表された。紙の出版物の推定販売金額は1兆5千億円を切り、雑誌の販売額もついに書籍を下回ってしまった。一方電子出版は、8割近くがコミックという実態ではあるが伸び続けている。紙と電子をあわせて対前年比0.6%減で、かろうじて電子が紙の落ち込みを補完していると言える。しかし電子をただ「補完」材料と考えているだけでは、いずれその効果も限られてくる。デジタルメディアの普及による、コンテンツの多様化が現在の状況をもたらしているとするなら、「紙」が前提の仕組みや考え方に変化が起きなければ、「産業」としての出版の縮小傾向は止まらないのではないかと危惧するものである。(Y)

■発行・編集 / 中西出版(株)
〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1-134
電話011-785-0737 FAX011-781-7516
E-mail: owl@nakanishi-shuppan.co.jp
■発行責任者 / 林下英二
■発行日 / 2017年3月24日



http://nakanishi-shuppan.co.jp